

食育推進～食育は心まで育てる～

雲山 明子

中村学園大学短期大学部幼児保育学科

概要

現代、食育という言葉を目にする機会が多くなった。平成17年7月15日、食育基本法が施行された。この法律の目的は、国民が生涯にわたって健全な心身を培い、豊かな人間性を育むことができるよう、食育を総合的かつ計画的に推進することにある。しかしながら、近年、日本では食生活の変化により生活習慣病などの病に繋がることが問題になっており、更に、食は体に影響を及ぼすだけでなく、心にまで影響を及ぼすことが分かってきた。一方、世界においても食育は注目を浴びており、様々な活動が行われ、それと同時に食料問題等、多くの食の問題を抱えている現状にある。そこで、本研究ではこのような背景の中で日本と世界の食の現状を明らかにしていくと同時に、どのような改善策が必要とされているかについて考察していく。

1章 「食」

現在多くの日本人が食生活等の乱れた生活習慣によって引き起こされた生活習慣病に悩まされている。また、対象年齢は以前に比べて低年齢化しており、その原因は戦前から戦後そして現在までの食生活の変化と考えられる。そこで、この章では食育の「食」に関する生活習慣病および食生活の変化について述べていく。

1.1節 生活習慣病

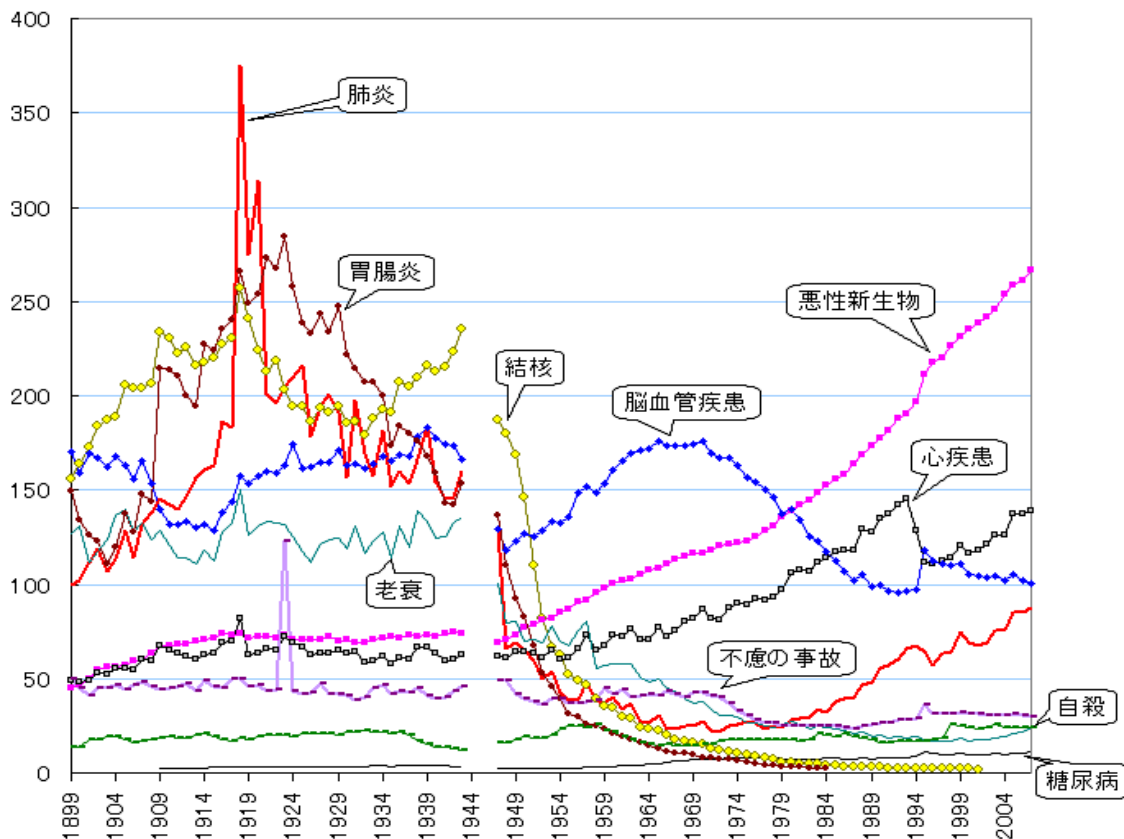
生活習慣病とは、日常の乱れた生活習慣の積み重ねによって引き起こされる病気であり、数年前までは中高年がよくかかる病気として「成人病」と呼ばれていた。生活習慣病には様々な症状と疾患が含まれているが、肥満・高脂血症・糖尿病・高血圧をはじめとして、がん・脳卒中・肝臓病・骨粗しょう病なども含まれる。働き盛りに多い病気の為に成人病と呼ばれていたが、子どもの成人病が増加し、病気の原因が日常の生活習慣の影響が大きいことが判明した為、1996年に生活習慣病と改められた。生活習慣病は遺伝的な要因もあるが、食生活・運動・喫煙・飲酒・ストレスなどが深く関わっている。言い換えれば、普段の生活習慣を見直し生活習慣を改善することにより、病気を予防して症状が軽いうちに治すことも可能な病気とも言えるのである。

成人病の中でも特にガン・心臓病・脳卒中を三大成人病と呼ぶ。成人病は40歳～65歳の働き盛りに多く、厚生省人口動態統計によるとこの年代の死亡原因の約66%を三大成人病が占めており、しかもその割合は年々増えている現状にある。例えば、1950年の主要死因は1位結核・2位肺炎及び気管支炎・3位脳卒中・4位ガン・6位心臓病となっていたが、1990年代以降では1位ガン・2位心臓病、3位脳卒中となっており、肺炎および気管支炎は4位、結核は不慮の事故や自殺・肝硬変よりも少ない8位となっている。但し、脳卒中については1965年頃の一時期にピークとなったものの、その後減少傾向にあるが、これはあくまで死亡率が減ったということに過ぎず、反して患者数は増えているのが現状である。この要因としては、医療技術が進歩したことで発症しても死亡するまでには至らなかったというケースが多くなったからである。また、ガンと心臓病については未だ増加し続けており、その増加ペースは一向に衰える気配が見られない。

戦前の死亡原因として最も深刻だったのは肺炎や胃腸炎といった感染症である。肺炎と気管支

肺炎を合計すると 1899 年から 1922 年まで第 1 位の死因であった。特に、1918 年から 1920 年まではインフルエンザの世界的な流行があり、日本でも高い死亡率を示した。1930 年代から戦後しばらくは結核が死因第 1 位となっていたが、戦後、結核に有効な化学療法が開発されたのを契機として、BCG 接種による予防・ツベルクリン検査・全国民一律の胸部 X 線検査による患者発見、さらに、化学療法による治療をあわせた対策により結核事情は一変した。今日の日本の医療機器において、X 線検査装置をはじめとする画像診断機器が世界的な競争力を有しているのも当時の取り組みが元となっている。以下のグラフは克服すべき病気の種類が過去から大きく変貌を遂げている状況を示している。

主要死因別死亡率(人口10万人対)の長期推移



(注)1994年の心疾患の減少は、新しい死亡診断書(死体検案書)(1995年1月1日施行)における「死亡の原因欄には、疾患の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください。」という注意書きの事前周知の影響によるものと考えられる。2007年(データ末尾年)は概数。

(資料)厚生労働省「人口動態統計」

第二次世界大戦後、栄養状態の改善のサルファ剤等の抗生物質の出現に伴い、感染性疾患が大幅に減少し、結核対策も進んだ結果、これらに代わってがん・脳血管疾患・心臓疾患など老化と結びついた疾患が増大した。1957年頃からこれらは3大成人病と称され、主たる克服対象となった。その後、1996年頃からは三大成人病をはじめとして糖尿病や慢性肝疾患などが永い年月を経て各個人の生活習慣とそれらの疾患の発症との間に深い関係があることが明らかとなり、成人病は新たに「生活習慣病」と称されるようになった。

近年の特徴としては、生活習慣病の中でもがんが循環器系の疾患に比べて独り暮らし世帯の死亡率が上昇傾向にある点や高齢者が肺炎で死亡することが多くなっている点などが目立っている。

がんの発生に影響する環境の要因としては、食事→喫煙→職業性→環境汚染の順に高いと考えられており、これは食事の改善や禁煙ががん予防に非常に大切であることを意味している。また、心臓病は心臓の動脈硬化が原因であり、更に血管が狭くなって血液の流れが悪くなった状態を狭心症と呼び、血管が詰まることにより酸素の供給が少なくなると、細胞は壊れて死滅する心筋梗塞へと進行していく場合もある。そして、脳卒中は脳血管障害の総称であり、脳の血管が破れたり、動脈硬化等で血管が詰まる等して脳の細胞が死んでいく障害であり、場合によっては言語や体に麻痺が残ってしまう事もある。

以上のように、高度に医療が発達した現代においても生活習慣病が主要な死亡原因となっていることは事実であり、社会の大きな関心事ともなっている。少子高齢社会に進んでいく日本において、各個人の健康に対する更なる意識向上が重要であることはもちろんの事、病予防の為に食生活の改善やスポーツ・趣味等に打ち込んでストレスを溜めない為の自助努力も大切なことである。

1.2 節 食生活の変化

戦前、日本人の食生活は高塩分・高炭水化物・低動物性たん白というパターンであったが、現代の日本人の食生活は戦前に比べて大きく変化している。戦前では、漬物・梅干し・佃煮等の高塩分のものをご飯のおかずとして食べる為に自然とご飯の量が多くなり、卵・魚・肉等の動物性たん白は控えめであったが、第2次世界大戦後に食生活の欧米化が急激に進んだ結果、ファーストフード・インスタント食品の出現やファミリーレストラン・コンビニエンスストア等の社会環境の変化も伴って、高カロリーかつ高脂肪の食生活が日常的なものとなっている。特に、かつての日本人があまり摂取しなかった動物性脂肪を多く摂るようになったことが一番の大きな変化と言えるであろう。

10代から20代の若い世代では朝食を食べない人の割合が他の世代に比べて高く、食事への関心度も低いことがNHKの世論調査で明らかとなった。この調査の中で朝食について尋ねたところ、自宅やファーストフード店・喫茶店などを合わせて朝食を食べた人は91%、食べない人は9%となっている。しかし、年齢・性別で詳しく見てみると、朝食を食べない人は10代・20代の場合は男性25%・女性20%となっており、若い世代でその割合が高いことが判明した。更に、「食事で気をつけていること」については、「一日三食」が60%でもっとも高く、次いで「栄養のバランスに気をつける」が54%、「特にない」は12%に過ぎなかった。しかし、「特にない」について10代・20代に限定した数字では、男性35%・女性23%と若い世代に高い傾向が見られた。若い世代は「朝食も採らず食事に関心が薄い割合が高い」という調査結果は若者の食への無関心さを現わしていると言えるであろう。これは、家庭や学校で勉強などが優先され、食事への配慮が後回しにされてきた結果とも考えられ、こうした若者が家庭を持った時の食生活が心配されている。

このような若年層の傾向は現在の飽食状況を表していると好意的に解釈することもできるが、食事に対する様々な知識・知恵の学習を後回しにした「世の中のしくみ」の結果が徐々に悪い方向で現われてきたと考える方が自然であろう。「衣食住」の言葉に代表されるように、食事は人間に欠かせない生活要因の一つである。生活習慣病や様々なアレルギー体質の問題や花粉症等、ここ数十年の間に身近で拡大化しつつある多くの病理も食生活の変化・無関心に多くの面で関係していることは事実であり、従って、今からでも食事への注力をこれまで以上に高めることが必要となっていくのである。

2 章 「育」

妊婦の喫煙、アルコールの摂取、睡眠薬の併用は生まれてくる子どもに多大な影響を及ぼすこ

とが明らかとなっている。また、「食」は生まれてきた子どもに対して、体の成長や心に大きな影響を及ぼしており、子どもにとって食べるということは体の成長のみならず豊かな心を創造する役割も兼ね備えている。そこで、この章では栄養面と発育の関係性、また、「食」がもたらす子どもの心への影響について述べていく。

2.1 節 栄養と発育

食事をする理由は「生命の維持」や「活動」であるが、大人と違って子どもには「体の成長」という目的があり、特に、乳幼児期は一生のうちで最もエネルギーが必要な時期である。産まれて約半年程までは母乳や粉ミルクだけで栄養を取り入れて、併せて離乳食に入るが、この時期に必要な量としては、カロリーが「120cal」×「乳児の体重 (kg)」、タンパク質が「3.3g」×「乳児の体重 (kg)」、脂肪が乳児の体重の約40%以上が目安とされている。但し、幼児期から中学生の時期になると乳児に比べて必要量は大きく減り、1歳の必要量は体重1kgあたりカロリーが90cal、タンパク質が3g、脂質が30%～40%である。また、15歳の必要量は体重1kgあたりカロリーが40cal、タンパク質が1.5g、脂質が25%～30%である。このように、子どもの成長に合わせて必要量は変化し、数値から分かるように子どもは体の割にはたくさん食べる必要があるのである。勿論、ただ食べるだけでは栄養バランスが崩れ、肥満・貧血等になりかねず、その為、厚生省が勧めるように「1日30品目」の食品を食べるように、かつ、楽しく食事ができるように心掛けていくことが大切なのである。

次に、妊娠中の妊婦に対するアルコールや喫煙または睡眠薬の影響について、妊娠中にこれらを摂取すると生まれてくる子どもに大きな影響があると言われている。私たちは様々な個性をもって生まれてくるが、時にはそれが障害と呼ばれることもある。しかし、先天性の障害の多くは原因が解からず防ぐことができないと言われているが、アルコールや喫煙または睡眠薬の摂取を起因とする障害はそのすべてが予防可能と言っても過言ではない。研究により、アルコールは胎児の脳になんらかの障害をもたらす可能性があることが分かっているが、一方で調査によると日本では18.1%の妊婦が妊娠中に飲酒した経験があると答えている現状である。また、妊婦の喫煙の影響は非喫煙の妊婦に比べて自然流産の発生率が約2倍高くなることや、出生後の身体発育や知能発達の遅延も引き起こすことがあることも明らかになっている。加えて、母親が睡眠薬を妊娠中に服用していた場合、生まれてきた胎児は睡眠薬中毒の状態となっている例が多いことも事実である。これらのことを考える時、生まれてくる子ども達が重荷を負うリスクを少しでも減らす為にも予防できるものは予防して、健康な子どもを生む為にも妊婦自身がしっかりと意識して注意していくことが必要なのである。

2.2 節 食は心を育てる

近年、言われる「キレる子ども達」を生み出す原因として、農薬・食品添加物・有害金属・環境ホルモン等による脳内汚染がその一因と言われている。添加物が多く入った手軽なジャンクフードやバランスの悪い食事をしていてと体の中の栄養バランスが崩れて脳細胞にも影響を及ぼすことが指摘されている。例えば、カルシウムが足りないとイライラすると言われているのはよい例である。つまり、心の状態にもミネラルや微量栄養素も必要となるのであり、このようなことから考えると食事からとる栄養成分と心とは何らかの関係があると言えるであろう。

アメリカの著名なアレルギー専門医・ファインゴール博士の著書「なぜ、あなたの子どもは暴れん坊で勉強嫌いか」によると、食品添加物のある食品を一切取らないように指示をした患者に興味深い変化が表れた。10日目程から患者の精神状態は正常に戻り、人々とも和やかに接するようになった。しかし、食事療法をやめると患者の精神的状態がまた悪化した。要するに人工着色料や食品添加物を避けた結果、原因がよくわからなかった精神的異常が改善されたのである。食

事は一生を左右するといっても過言ではない。そして、食事は身体のみではなく心の状態にも影響する可能性を秘めており、ゆえに、食事が子どもの身体と心の健康にとっても大切だということを大人がしっかりと子ども達に伝えていくことが必要となっていくのである。

食育では楽しく食事をするということが基本にある。子どもを育てる為には、家族で食事をするのが最も大切なことであり、子どもにとっても食事は生活の中で最も楽しい行為なはずである。しかしながら、現代の食卓の風景には異変が起きている。例えば、子どもに食事の様子を描かせると、一緒に食卓を囲んでいる親の姿が人の記号で表されていたり、顔の表情が全くなかったり、ただ黙々と食事をしていると思わせる絵が増えている。このような時代だからこそ、今、楽しい食事、笑顔の食事、食事の時間を見直すべきであると考えられている。

具体的に、楽しい食事や笑顔の食事の為に大切なことは、食べることに感謝することと空腹感を感じることである。生きているものを食べることはその生命を奪っていることであり、だからこそ『食』への感謝を子どもたちに教えておく必要がある。スーパーで売っている切り身魚を見て成長してきている現代の子ども達にとっては魚の形を見ても名前が分からず、野菜でも何でも畑を見ていないからそれ以前にいかにか人の手がかかっているかを知る由もない。よって、食料は生き物であるという概念が希薄となり、結果として食べ物を粗末に扱い、無駄にしてしまうのである。更に、空腹感を感じることは何かを食べたいという欲求へと繋がり、それにより食への意識が高まっていく。よって、子どもが空腹感を覚え、そして、非常に温かい環境の中で温かい食事を提供されることで満たされることにより、食事の楽しさを覚え、この環境で食事をする次回への期待感を持つことにも繋がっていくのである。

子どもの健康は食べ物からというのは、いわば当然のことかもしれないが、その食を通して『心の健康』や季節を感じる『豊かな感性』を磨くことが当たり前になることが子どもにとって幸せなのではないだろうか。これは子どもだけでなく食べることで育つ大人も感謝の気持ちを持ち、子どもと一緒に食について考える機会を持つことで改めて親子で食の大切さを認識できるだろう。

3 章 世界の食料事情

食育問題は日本だけではなく世界でも大きく取り上げられており、それぞれの国で様々な活動が行われている。その一方、飢餓や飢えという食生活の改善すべき問題も浮かび上がってきている。そこで、この章ではEUとアジアでの食育への取り組みについて述べると共に、現代の開発途上国の抱える食生活の問題およびその現状について述べていく。

3.1 節 海外における食育展開

現代、世界で食育は大きな注目を浴びている。そこで、この節ではEUの先進諸国とアジアにおける食育に関する世界の食事情を述べていく。以下は、EUとアジアそれぞれにおける食育への取り組みを表にしたものである。

EUにおける食育への取り組み

国名	内容
イギリス	「健康な学校プログラム」、「育てる学校プログラム」を実施
ドイツ	肥満予防のための「健康推進計画」を実施
フランス	「第二次全国栄養健康プログラム」を実施
イタリア	スローフード運動
オランダ	「健康的な食生活のための指針」を実施
ノルウェー	「国民のよりよい食生活のためのアクションプラン 2007-2011」を実施

デンマーク	「デンマーク食生活勧告 2005 年」を実施
スウェーデン	「良い学校給食の指針」を作成

EU では、欧州委員会が健康的な食生活や運動等を促進する為、2003 年から 2008 年にかけて「健康に関する五ヶ年戦略計画」を実施しており、2005 年には同委員会が「健康な食生活と身体活動の促進：欧州内での過体重、肥満、慢性疾患の予防」を提案して、様々な機関や団体等との議論が進められている。また、2007 年 2 月には「健康のための予防栄養と運動－健康的な生活の鍵」と題する会議がドイツのバーデンヴァイラで開催され、EU 加盟国代表や市民団体等の参加者によって、食事と運動を通して、健康を増進して疾病を予防する為の戦略が議論された。

世界に浸透してきつつある有名な食育への取り組みとして挙げられるのは『スローフード運動』である。これはスローフード協会を中心として、消えつつある郷土料理や質の良い食品を守り、質の良い素材とこれらを提供してくれる小生産者を守り、そして、子ども達を含めた消費者全体に「味の教育」を勧めることを目的とする運動であり、イベントの開催、出版、学校プログラムの実践等の活動をはじめとする様々な活動が各地域で展開されている。

アジアにおける食育への取り組み

国名	内容
韓国	「韓スタイル育成総合計画 2007-2011」を実施
シンガポール	「健康なライフスタイルのためのプログラム」を実施
オーストラリア	「公衆栄養に関する戦略」を実施
ニュージーランド	「健康な食事－健康な活動」を実施

一方、アジアにおける状況として、韓国では「国民健康増進法」に基づき、各種事業が進められている。主なものとして、2007 年 2 月に政府により公表された韓国の伝統文化を世界に紹介すること等を目指す「韓スタイル育成総合計画 2007-2011」において、韓国料理が推進分野の一つとして選定され、代表的韓国料理の海外への普及方法の開発や韓国料理店の情報提供等が計画されている。また、オーストラリアでは肥満の予防・野菜や果物の摂取量の増加等を目標として、2000 年から 2010 年にかけて「公衆栄養に関する戦略」が政府により進められている。これは政府の支援により、健康的な生活習慣、特に健康的な体重維持の重要性への意識を高める為、著名人が「健康活動大使」として地域で啓発活動を行うプログラムの実施、食事に関する情報の入手や各人の食事のカロリー計算ができるウェブサイトの開設等が実施されている。更に、民間団体が中心となり毎年 10 月に実施される「栄養週間」において、学校や職場でのヘルシーランチを推奨する等、健康な食事への関心を高める為の取組が展開されている。

このように、それぞれの国によって様々な食育活動が展開されているが、スローフードに関しては豊かな食につながる思想と、最終的には生活水準の低下に帰結する「スローライフ」という概念に矛盾があるという批判的な意見もあり、活動によっては賛否両論なのが現実である。

3.2 節 食料の行き先と飢餓

前節でも述べたように、現代、世界で食育は大きな注目を浴びている。平成 21 年 2 月 9-11 日、東京国際フォーラムにおいて世界各地の一流料理人が一堂に会して調理の技術やアイデアを披露する「世界料理サミット 2009 Tokyo Taste」が開催された。そこでは内閣府・外務省・文部科学省・厚生労働省・農林水産省・経済産業省・観光省からもリーフレットやパンフレット等が配布され、関係府省庁の連帯による食に関する情報の発信が行われた。また、独立行政法人国立健康・栄養研究所ではアジア各国の若手研究者を研究所に招聘して研修及び共同研究等を行っており、研究者達の「食育」への関心は強く、自国での展開も含めて、その手法や成果が世界に発信されるこ

とを期待するとの意見が寄せられている。

日本政府の食育への取り組みとして、外務省では食育の海外展開の一環として海外広報活動の中でも食育関連トピックを取り上げている。具体的には、在外公館を通じて配布している一般広報誌「にっぽにあ」、在外公館で上映や貸出および無償提供により海外のテレビ局にて放映されている映像資料「ジャパン・ビデオ・トピックス (Japan Video Topics)」において日本の食文化や食育活動の紹介を行っている。また、平成 18 年 10 月より外務省と農林水産省の共同事業として「WASYOKU Try Japan's Good Food」事業を立ち上げた。これは在外公館等において、日本食文化の普及及び日本産農林水産物等の輸出促進の支援を目的として、各国要人やオピニオンリーダー等に対して日本産の食材を用いた日本食等を提供するものであり、平成 20 年度末までに 28 ヶ国で 53 件が実施されている。この他にも広く現地の人々に対して日本食文化を紹介する為に在外公館や国際交流基金海外事務所等の活動として、日本食フェア・日本食紹介デモンストレーション・和食講座等を行っている。

このように食育は海外でも展開・注目されているが、同時に、海外の食生活での改善すべき問題が浮き上がってくる。

2007 年、世界では 9 億 2300 万人が栄養不良や飢えに苦しんでいる現状にあり、その大半が開発途上国で暮らしていると言われており、更に、1 日に 16000 人（約 5 秒に 1 人）の子どもが飢えと栄養失調で死んでいる現状なのである。しかしながら、世界では 62 億の人口を養うに十分な穀物が生産されているのである。では、なぜこれほど多くの人が飢えているのだろうか。その主な要因として挙げられるのが肉生産による資源の無駄遣いである。

世界で生産される多くの穀物が人間の食料ではなく、家畜の飼料として使われている。世界の経済発展と共に、肉・卵・乳製品の消費量は増える一方であり、それに伴い世界で飼われている家畜動物は過去 50 年で 5 倍に増えている。その為、世界で生産される穀物の半分、とうもろこしの 3 分の 2 が家畜用飼料にされている。特に、アメリカでは農地の 80% が家畜飼料の生産に使われ、生産されるところの 80%、オーツ麦の 95% が家畜飼料となり、その他、大豆ミール 3000 万トンが家畜飼料用に使われているのである。しかし、穀物をそのまま食べるのではなく動物に与えてその肉を食べるとするのは非常に効率の悪い食物生産方法であると言っても過言ではない。何故ならば、例えば牛肉を 1 キロ生産する為には 8 キロ（高級霜降り肉は 10 キロ）の穀物が必要となり、一番効率の良い七面鳥でも 3 キロの穀物が必要なのである。今、日米の人々が肉の消費量を 20% 減らすだけで世界の飢えをなくすだけの穀物が余ると言われているように、多くの穀物が無駄遣いされている現状なのである。

このような窮状を改善する為、我が国では自らの肉の生産による資源の無駄遣いを防ぐ活動とは別に様々な形で取組を行っている。日本は、開発途上国が直面する食糧不足を解決する為に二国間及び国際機関経由で平成 20 年度に 578 億（平成 19 年度約 197 億円）の食糧援助を行うと共に、食糧増産及び貧困削減の為に約 59 億円（平成 19 年度約 57 億円）の貧困農民支援を行った。また、国連食糧農業機関（FAO）に対しても約 92 億円（平成 19 年度約 92 億円）の分担金を拠出し、更に、国際協力機構（JICA）を通じて開発途上国の専門家や行政官を対象に食品検査・衛生管理・加工保存等の技術向上や衛生・栄養分野の指導者育成の為に様々な研修事業を実施する等、開発途上国における食生活の改善にも取り組んでいる。

飢えの問題は政治的・経済的要素が様々に絡んでおり、先進国が肉を食べる量を減らせば自動的に余った穀物が飢えている人に行くというほど単純に解決できる問題ではないが、今のように先進国で肉を過分に食する限り、食糧や地球の資源は絶対的に足りないということを知り、自分が何を食するかという選択が世界にどのような影響を与えるかを先進国の人々が自覚しなければならないのではないだろうか。

まとめ

これまで述べたように食は体や心に多大な影響を及ぼしている。例えば、時代の移り変わりと共に食生活の文化は変化していくものであるが、現代、日本においてはその変化が生活習慣病等の原因となっており、変化に沿った対応をしていくことがこれからの課題となっている。一方、海外における食育問題への取り組み目を向けると、先進国での食育問題への取り組みは各国で様々な活動が積極的に行われていること、それと同時に浮かび上がる飢えや飢餓の問題等、世界の食事情は様々である。特に、飢えや飢餓については深刻な問題となっており、先進国の人々の意識を高めることで問題解決への一歩になるのではないだろうか。また、人間と食は切り離せない関係である。食を通して、体の健康そして心の豊かさを得る為には子どもの頃から愛情ある食事に触れておくことが大切である。その為には、子ども達に対して最も影響を与えるだろう周囲の大人達がどのような行動を示すかがポイントであり、食に対して意識を持ち、親子で食育について考えることができたならば食の大切さに気付くことができるだろう。子ども達の未来の為、大人がこの問題に真剣に取り組み、子ども達を明るい未来へ導いていくことが重要であることを私たちは忘れてはならないのである。

おわりに

この論文は中村学園大学短期大学部 幼児保育学科 橋本弘治研究室において2008年から2011年に作成した卒業研究論文です。当研究室では卒業研究論文集を「幼児保育」と中村学園の学園祖 中村ハル先生の遺訓「努力の上に花が咲く」を組み合わせ「中村学園大学短期大学部「幼花」論文集」（以下、「幼花」論文集と記す。）と名付けております。但し、これは中村学園大学短期大学部としての正規の発行物ではありません。「幼花」論文集は当研究室にて作成した卒業研究論文の論文集です。

卒業研究論文は2008年より当研究室のホームページにて概要のみを公開しておりました。また、「幼花」論文集は卒業生への配布を目的として、基本的には非公開を前提として、パスワード保護により当研究室のホームページよりリンクしておりました。但し、個別にお問い合わせを頂いた教育・研究機関の関係者にはご理解頂いた上でお渡ししております。

この度、2018年8月現在においてパスワード保護が何らかの理由で解除され、「幼花」論文集が一般公開されている事実を確認いたしました。この事実に関しまして、ホームページを公開する者として管理不行き届きがありましたことを心よりお詫び申し上げます。

これまでリンク元である当研究室のホームページより論文へアクセスされた方はご理解された上でご覧いただいていると思っておりますが、それ以外の経路により直接論文へアクセスされた方には誤解を生じる論文集の名称であることから、この度、この文面を「幼花」論文集のすべてに追記することにいたしました。また、これまで卒業生への配布と総合演習（卒業研究）発表会での使用を前提としておりましたので、著作権表示として「中村学園大学短期大学部」と表記しておりましたが、「お問い合わせ先」と変更しております。尚、「幼花」論文集の詳細についてはリンク元である当研究室のホームページをご覧ください。

<http://www.nakamura-u.ac.jp/~hashimot/members/members.html>

「幼花」論文集は保育・幼児教育を中心として、保育者を目指す学生が真摯に取り組んだ卒業研究の成果集です。当研究室としましては、この「幼花」論文集が教育・研究をはじめとして、子ども達を取り巻く環境改善の一助となることを希望しております。

上記をご理解の上、本文をご覧いただきますようお願いいたします。

2018年8月8日
中村学園大学短期大学部
幼児保育学科 橋本弘治